

## 酒田市立資料館 第196回企画展 「酒田まつりの山鉾と、画人・文人の掛軸」

### 400年の歴史を持つ酒田まつり

酒田まつりが始まったのは、今から400年以上前の慶長14年(1609)。もともとは酒田の産土神である上・下の山王社の祭礼として、旧暦四月の中の申の日(※)に行われていた。

上の山王社は、東禅寺城(亀ヶ崎城)の城下町だった内町組、米屋町組の鎮守として、下の山王社は商人町だった酒田町組の鎮守として信仰を集めてきた。現在も「上の山王さん」「下の山王さん」と呼ばれ、市民に親しまれている。

祭礼が両社合同で行われるようになったのは正保4年(1647)から。町奉行・乙坂六左衛門の発意によるものだった。その後、酒田の繁栄とともに祭りも盛大になり、その評判は江戸や大坂にまで届いていた。

明治に入ると、神仏分離令によって両社の名称は日枝神社になり、祭礼日は新暦の採用によって5月20日になった。

酒田大火翌々年の昭和53年(1978)の山王祭りには、復興のシンボルとして雌雄2対の大獅子が渡御行列に登場し、昭和55年(1980)に、現在の「酒田まつり」に名称を改めた。平成21年には創始400年本年祭を盛大に行っている。

※中の申の日…その月の2番目の申の日



大正時代頃の酒田まつり

### 京都の祇園祭に倣った立山鉾

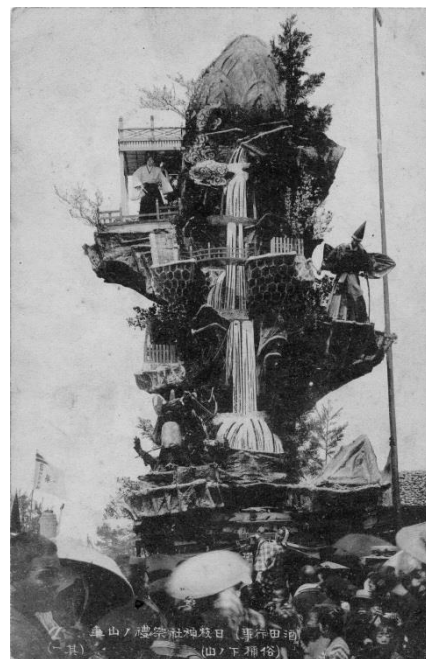
山王祭りの特色は、渡御行列の美しさと、神宿飾りの華やかさにあるが、天明(1781~1789)の頃から、京都祇園祭の山鉾巡業に倣った、雲を突くように高い山車(立山鉾)が名物になっていた。このような形式が整ったのは、本間光丘の力によるものだろうといわれている。

光丘は、火災で焼失した下山王社を再建するなど、神社仏閣の再建整備に尽力した。それは信仰心だけでなく、神社仏閣を立派にすることが町を活気づけ、観光にもつながると考えていたからだった。祭りに力を入れたのも、酒田をにぎやかにするためだったのだろう。

立山鉾はその年の頭家(※)が作ったが、祭りの半年も前から、趣向を凝らして秘密裏に製作したといわれている。明治35年(1902)に作られた本町一丁目の立山鉾は高さ6丈5尺(約20メートル)もあり、旧両羽橋から見えたといわれるほど見事なものだった。

酒田に電線が引かれた明治41年(1908)の祭りを最後に、その姿を消したが、平成20年の酒田まつりで、酒田青年会議所が100年ぶりに復活させ、現在も祭りの呼び物になっている。

※頭家…山王祭りの際、神事の補佐に当たる責任者で、その年の氏子の代表を当人と言ひ、当人の家のことを頭家と言った(当家とも)。神様を迎える神宿を務め、大祭日にかかる費用を一切負担するなど、「頭家を三回もすると家がつぶれる」といわれるほど経済的な負担が大きかったが、有力者としても認められた。



明治41年の立山鉾

## 展示している画人・文人

<sup>さとう</sup> <sup>ばい</sup>  
**佐藤 梅宇** 生年不詳～安政4年(1857)

飽海郡荒瀬郷の大庄屋・佐藤源内の子として生まれる。9歳で父親を失い、その後は母親に育てられた。

幼少の頃から絵を描き、長じて江戸の谷文晁に学ぶが、病弱だった母が倒れると郷里に戻る。その後、庄内藩に仕えて、給人組外(くみはずれ)になる。天保12年(1841)、島役人を命ぜられて飛島に渡ると、仕事に励む一方、島の自然や暮らしを描き、「飛島図絵」など貴重な資料を残している。

梅宇は雅号。花鳥人物が得意で、特に梅の花を好んだことから、鶴岡の文人・池田玄斎が名付けた。

琴も巧みで、藩主・酒井忠発(ただあき)の前でも弾いている。



佐藤梅宇筆「孔子像」  
(絹本着色／江戸後期)

<sup>いがらし</sup> <sup>うんれい</sup>  
**五十嵐 雲嶺** 生没年不詳

飽海郡吹浦村の菅原某の子として生まれ、後に酒田八軒町の五十嵐染屋の養子となる。幼少の頃から絵がうまく、仙台の絵師・春国が庄内に来遊した折に学んだといわれている。家業の染屋の傍ら絵師としても活動した。

嘉永年間(1848～1854)、本町一丁目の五十嵐仁左衛門の依頼を受けて「酒田十景」を描いた。仁左衛門はこれを木版画にして売り出し、好評を得た。上日枝神社に「上山王祭礼図屏風」と拝殿掲額がある。

<sup>はっとり</sup> <sup>すがお</sup>  
**服部 菅雄** 安政4年(1775)～天保8年(1837)

国学者。遠州引佐郡都田村・富田氏の二男として生まれ、駿州島田の商家・服部家の養子となる。はじめは漢学を修めたが、のちに国学を志して寛政10年(1789)4月に本居宣長に入門。生涯『源氏物語』を研究し続けた。和歌をよみ、絵も描いた。富士山と桜の花を得意とした。

天保4年(1833)から国学普及のために全国を周遊し、同7年(1836)に酒田を訪れる。路銭がなく、酒田では神社仏閣の縁の下や木賃宿で寝た。商人・白崎五右衛門の知遇を受け、梵鐘寺住職・魯道(ろどう)、武芸者の佐藤三弥記(みやき)らと親睦を深めたが、貧困のうちに酒田今町の木賃宿で亡くなり、持地院西の松林に葬られた。

<sup>すがわら</sup> <sup>ばいり</sup>  
**菅原 梅里** 明治7年(1874)～昭和27年(1952)

田川郡木川村(後の新堀村、現在は酒田市)の旧家・菅原市郎右衛門の家に生まれる。若い頃は鉄道員をしていたが、後に退職して画業に専念する。

南北合派(南画風と北宗派の中間に位置した画風)と称される画風で、多くの水墨画を描いた。山形の画家・下條桂谷(げじょうけいこく)に師事し、大正9年(1920)には美術協会展覧会の委員も務めた。山水画を得意とし、優れた作品が庄内各地に残っている。

晩年は、酒田山椒小路に住んだ。

<sup>かとう</sup> <sup>せつそう</sup>  
**加藤 雪窓** 明治5年(1872)～大正7年(1918)

秋田に生まれ、幼いころに父母を亡くす。その後、祖父とともに放浪し、明治15年(1882)に酒田に移り住んだ。絵画の才能から神童と呼ばれ、上京して当時絵画界で活躍していた橋本雅邦に師事。明治39年(1906)に酒田に戻り、今町観音小路に住み、多くの絵を残した。

名は達也、久則。雪窓、蔵鷺軒(ぞうろけん)と号した。

秀作「釣艇夕照図」「担薪読書図」の2点が宮中に収められた。黄檗宗(おうばくしゅう)の高僧・紫石禅師などとも交わり、仏画など禅的な作品も多く描いている。

酒田の漢学者で郷土史家でもあった須田古龍と交流を持ち、詩文もたしなんだ。

<sup>いちばら</sup> <sup>えんたん</sup>  
**市原 円潭** 文化14年(1817)～明治34年(1901)

酒田天正寺町の呉服屋・市原平三郎の三男として生まれる。名は祐助。江戸の鍛冶橋狩野家に入門して日本画を学ぶ。たびたび京都、奈良など西国の寺社を巡って多くの古仏画を模写するとともに、冷泉為恭(れいぜいためちか)に学び、独自の画風を確立した。

帰郷後は鶴岡に住み、嘉永4年(1851)に鶴岡・大督寺で仏門に入った。安政3年(1856)に再び江戸に上って小石川伝通院に学び、さらに京都・知恩院で修行し、絵画を研究する。この頃、藤本鉄石、村井半牧などの勤王の志士と交わる。

文久3年(1863)に帰郷すると、田川郡大淀川村(現在は鶴岡市)淀川寺(じょうせんじ)の住職になる。晩年はしばらく酒田千日堂南町に隠居したが、再び淀川寺に戻り、85歳で亡くなった。

円潭のほかに、探淵斎守真、淵潭斎守純、月山人、浮木叟などの雅号を持つ。代表作に「二河白道図」「法然上人御絵伝之図」などがあり、庄内にたくさん作品が残っている。

<sup>いとう</sup> <sup>ほうざん</sup>  
**伊藤 鳳山** 文化3年(1806)～明治3年(1870)

儒学者。本町の医師・伊藤維恭の二男として生まれる。幼いころに父母を亡くし、13歳の時には兄を失い、大工町の医師・須貝玄益に引き取られる。17歳で江戸に上り、儒学者・朝川善庵に入門し、養子になるが間もなく離縁。

その後、渡辺崋山の推薦で三河田原藩に移り住み、藩主に書を講じる。天保11年(1840)、職を辞して京都に開塾。嘉永2年(1849)に江戸に移り、安政5年(1858)に酒田に帰郷して塾を開いている。

文久元年(1864)に江戸に戻り、元治元年(1864)に再び田原藩に招かれる。65歳で亡くなり、田原に葬られる。

渡辺崋山、田原藩医・鈴木春山とともに「田原三山」と称された。



加藤雪窓筆「岩戸別命尊像」  
(紙本着色／明治後期)



市原円潭筆「文殊菩薩」  
(絹本着色／明治期)

にしおか しゅうせき  
西岡 周碩 天保9年(1838)～大正元年(1912)

佐賀鍋島藩の支藩・蓮池藩の医師で、戊辰戦争では北越討伐に従軍した。その後は官職につき、明治2年(1869)に設置された酒田民政局長官として赴任し、廃藩後の処理に当たった。この年の6月、天正寺に学而館を創立し子弟を教育する。酒田の公立学校の最初である。

8月に民政局が廃止され、第一次酒田県が置かれると大参事に任ぜられ、知事を代行し治績をあげた。しかし農民が起こした減税運動「天狗運動」がしずまらず、10月に失政の責めを問われて、白石按察使府(あぜちふ)に謹慎を命じられる。

後に、東京府大参事、判事を歴任し、明治23年(1890)に函館控訴院長となる。晩年は小田原で悠々自適の生活を送った。詩、文章、書でも知られた。

こしょう あおづか こうじ  
胡沙(青塚 恒治) 明治18年(1885)～昭和33年(1958)

代々金物屋を営む酒田本町の地主・青塚岩治の二男として生まれる。荘内中学校から旧制第一高等学校に進むが、父親が亡くなり中退し帰郷。一時期、酒田商業学校(後の酒田商業高等学校)の教員となる。

その後、酒田町会議員、酒田町消防組頭、酒田町名誉助役を務め、昭和6年(1931)より山形県会議員となる。続いて酒田市議会委員となり、市会議長も務める。終戦直後の昭和20年(1945)10月に酒田市長に選ばれるが、連合軍の追放令により辞任。後に初代監査委員となる。

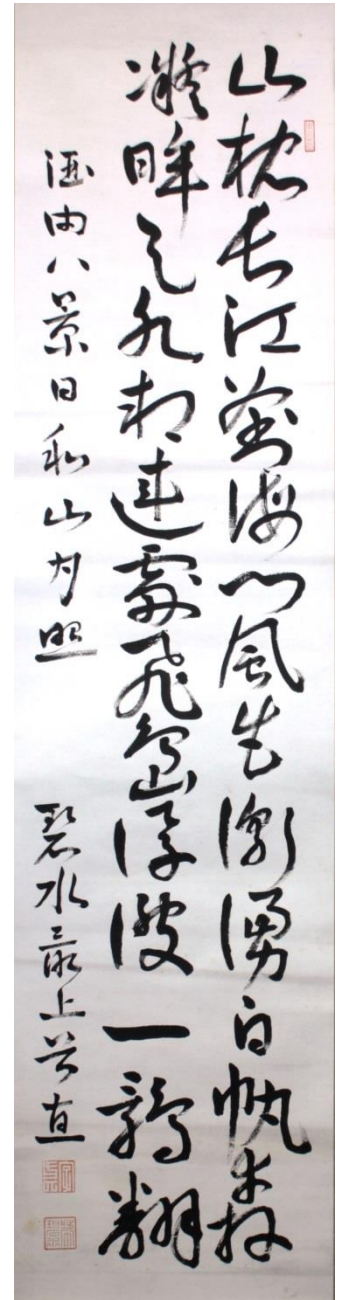
胡沙と号して俳句、漢詩をたしなみ、釣りを愛した。漢詩人・土屋竹雨とは同級で、生涯の友人だった。

へきすい もがみや なおきち  
碧水(最上谷 直吉) 明治9年(1876)～昭和21年(1946)

船場町の船問屋・最上谷三太郎の長男として生まれる。大型の汽船と鉄道の時代を迎え、酒田港が衰退を余儀なくされていた当時、藁工品問屋・最上谷商店を開業し、販路を北海道にまで伸ばすなど事業を拡張した。

大正6年(1917)に町会議員に、市制施行後は市議会議員となり、昭和10年(1935)から4年間、県会議員を務めた。この間、酒田の商業発展に努め、旧制酒田中学校の設置、港の整備など、酒田の発展に尽力した。

事業家、政治家として活躍する一方、今町に住んでいた漢学者・須田古龍の門をたたき、漢学、ことに漢詩を学んだ。碧水の号で、多くの漢詩を作り、昭和13年(1938)に土屋竹雨が編纂した『昭和七家絶句』には7首が掲載された。同17年(1942)に作った「酒田八勝」は詩吟として愛唱されている。



碧水筆「酒田八景 日和山夕照」

(紙本墨書/昭和)